

---

## Story that keeps being killed

佳生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Story that keeps being killed

### 【コード】

N5401F

### 【作者名】

佳生

### 【あらすじ】

そこにはあの日の記憶が血塗られながら残っているだけ。

**(前書き)**

日記からの持ち込みですが。気を付けて。

何をやってやがるんだ、こいつは、と思うこと、数日。  
さしもの俺も、聞かずにはいられなかった。

「……何やってんの」

「待ってるんだよ」

これ以上は、聞かない方がいいんだろうか。

いきなり、奴は部屋に籠り始めた。会わないし、話さないし、飯も食わない。ただベッドの柵によっかかって、腹の上で手を組ながら、ぼんやり辺りをみているだけだ。

「……あっそ」

何を待ってるのか、俺はあえて聞かない事にした。

が、それから数日しても、奴は出てこない。

「おい」

「ん？」

若干やつれた気がするが、奴の精神状態は至って普通だった。：  
並の人間と比べても意味がない気がするが。  
初めから頭の回路がおかしい奴だから。

「何待ってんだよ」

ついに俺は聞いてしまった。

「ああ、うん。僕が死ぬの、待ってる」

おーい。

間違い探しをさせられた気分だった。しかも左右で全く違う絵で。  
何が違うって、全部だよ。

「お前、意味ねえことすんなよ」

「意味ないかな。あると思うなあ」

実は寝てすらいらないんじゃないかと思いつつ、俺は奴がここ一  
週間ちよつと使っていない椅子に座る。

埃、払うべきだったか。

「こつやって死を待ちながら、生きること考えてるんだ。いいよ、  
今までにない答えが出てくる」 「……………例えば？」

興味ねえけど。

「この迫ってくる感じがたまらないとか」

「へえ」

「究極のジラし具合だね、とか」

「……………お前、おかしいよ」

分かってるけど。

「徐々に迫る死に、諦めるのかそれとも生に執着するのか知りたかったんだ。僕はどうやら楽しむみたい……」

「死にてえの？」

「そうなるかな」

なんで即答できんのか理解できねえけど、多分、奴の思考回路は、どっかで世界の中心・悟りの境地にでもトんでんだと思う。

死にたいって……へえ、そうか。

「じゃ、これ貸してやるよ」

これなら、楽に逝けるぜ。急所狙えば。

「やだよ、銃なんて」

触ろうとしないのは、死にたくないからか。

「持ちちゃったら使いたくなっちゃうじゃんか」

どっちだ。

「僕はね、ジワジワ死にたいの。一発で終りなんて……ねえ」

「じゃ、足と腕と膝と肘と太股と肩と、一番チッコイの使って、肺撃ち抜いてやるよ。その後、麻酔なしで残った球取り出して、中途半端に応急処置したら、そのまんま放置。……かなりジワジワ逝くんじゃねえの」

そこで目を輝かせてどうする。

「真綿で首を締め付けるが如く。……何回も失神しそうだね」

「その度、叩き起こすの面倒だなあ」

何ていいながら、俺はこっそりと奴に銃口を向けていた。

「いつもそうだよ。君は奪う側で、僕は奪わせる側」

「……まあな」

いいんじゃないか、別に。

「知ってるかい。最後にはね、何も残らないんだよ、奪う側も、奪  
わせる側も」

だって何にもないじゃない。とか。

「まだお前がいるよ」

「さあ、どうかなあ」

キミがミているボクはホントにソコにイるのかな

気味の悪い事を言う。

「いるだろ」

「触れるかな」

「触れるだろ」

ほら。

「それは人間の肌の感触かい」  
「当たり前だ」

じゃあキクよ。ねえキミ、キミはニンゲンの八ダのカンシヨクをオボえているかい。キミがシってるのは、そのテにモったテツのカタマリのツメたさとオモさとかたさだけだろう。そうだよ、だってキミは

「何だよ」

言いながら、引金を引いた。何度も何度も。足と腕と膝と肘と太股と肩を。順々に。

「殺す側の君なんだから、当たり前だよな？」

面倒だから、今回はこのままでいいや。

肺を撃ち抜いたはずの弾丸は、ただ、赤黒くカサついたシートとスプリングのきかなくなったベッドに、新しい傷を残しただけ。

「くたばりやがれ、クソが」

呟いた俺の耳には、ずっと奴の話が流れ込む。

どうして生きてるとか、死んでると考えるのかっていうと、ここに居るからそう考えるんだよね。だったら、居なくなれば考えない

と思うんだけど、居なくなるやりかたが肝心なんだと思うんだってそうでしょ。自分が死んだときに死んだって気がつけないで今度こそ永遠にそれこそ生き地獄みたいに生と死について考えていかなーといけなくなるじゃないか。それには耐えられない耐えられるはずがない答えがないから。だったら自分が確実に死んだっていうことを魂に教えこまなくちゃいけないよね。そうおもうでしょ。死ぬってというのは人生最大のイベントで、人間に多大な影響を与えるものなんだよ。恐怖か悲しさか楽しさか嬉しさかはたまた快樂かそれはやってみなくちゃ分からない好奇心が擦られる課題だよでもそれを試しても誰にも伝えられないんだから試す人は減らないし減らすこともできない君はどう興味無い死んだらどうなるのか君はどう思うコロすガワのキミはどうおもうコロすヒトはシぬときどうおもうのかなコロしたヒトのコトどうおもうかなそうだとコンドアッたらオシえてくれないかタノしみにしてるよ

キミがシぬのを

「死なねえよ、馬鹿が」

そうして扉を閉めた俺の背に、あの場所はどう思っているのだろう。

そんなのはどうでもいいか。

ただ、そこにある事実としては…俺は死にたくない死にたくないから、繰り返す。

俺が死ぬまで、俺は、俺達はあの日の狂劇を繰り返す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5401f/>

---

Story that keeps being killed

2010年10月21日21時52分発行